

清流

題字：芳野 充

令和3年10月30日
第58号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

それでも花は咲く

今月ご紹介させていただく「二十の徳目」は、十五番目の「忍耐」です。「忍耐」とは、思うようにならないとき、じっと辛抱することです。

わたしたちは日常において逆境に立たされたり、理不尽な思いに駆られたり、自分の思いどおりの結果が望めず悩み苦しむ、心が不安な思いに支配されることがあります。わたしも例外ではありません。

宗教的な話をするつもりはありませんが仏教では、人生の不条理に耐え、自身のみたくない部分も認め受け入れ、平常心を忘れない心をもつことを「忍辱」と言い、苦しみに耐えて辛抱することも修行の一つであると言われています。また「忍辱」のほかにも五つの修行があるようですが、これらを「幸せの花が咲く六つの種」と呼ぶこともあるそうです。

苦しみに耐えることも修行であること、それは幸せの花が咲く種の一つであることを知り、種田山頭火のみじかい俳句を思い出しました。

「ふまれてたんぼぼ ひらいてたんぼぼ」
たんぼぼは、さむい冬のあいだ、雪にふまれ人にふまれて、葉っぱは平べったくなくなっています。しかし春になると葉っぱをカブよくひろげ、たくましくも可愛らしい黄色い太陽の赤ちゃんのような花を咲かせます。誰がみていようとみていなくなるうとその花を咲かせます。そんなたんぼぼの根は意外にもしっかり太く、ながいものでは一メートルにもなるそうです。たんぼぼは、自分にとってきびしくつらい環境のなかでも、目にはみえないつめたい土のなかにしっかりと根をはり、春には明るい笑顔のような花を咲かせる。種田山頭火は、このことを知っていたのでしょう。短い俳句には、その思いが詰まっているように感じます。

自分にとってつらいことや思いどおりにならないことに対して、自暴自棄になったり他人のせいにしてたり、自分を責めてしまうことがあります。ですが、そのつらいことを避けずにあるがままを受け入れじっと耐えているときにこそ、その後の人生をふかく味わい、花を咲かせるための根をはっている瞬間なのかもしれません。

「忍耐」とは、思うようにならないとき、じっと辛抱すること。たんぼぼがつけたい雪のなかで人にふまれても、春には花を咲かせるように、わたしの心にも、明るい花を咲かせたいと思います。

加来 寛

